

331 山田喜之助氏逝去

〔法学新報〕第23卷3(262)号 大正2年3月4日

○山田喜之助氏逝去 中央大学社員にして講師たる従四位山田喜之助氏は去る二月二十日午込河田町の自宅に於て永眠せられたり氏は昨年二月頃より脳神経痛を患ひ宮本博士の診療を受けつつありしか十九日朝に至り暗睡状態に陥り二十日午前八時四十分遂に不帰の客と為られたる次第なり享年五十有五歳氏は大阪の人幼にして藤沢南岳翁に就きて漢文学を修め長して東京大学に入り政治法律の諸科を修め明治十五年法学士と為り大隈伯を佐けて東京専門学校を創立し同時に立憲改進黨の創立に与り

立憲政治の要義を提唱し後数年同志と共に英吉利法律学校を設立し又教鞭をも執られ明治十八年司法官と為りしか当時仏人ボアンナード氏の編纂したる民法典及び独人口エスレル氏の商法典を排撃して日本の法典は日本人自ら編纂すへしと絶叫し之を以て千載雪くへからざるの国辱とし却て要路者の忌む所と為り之か為めに大審院判事の榮職を抛ちたることあり然るに幾何もなく之か輿論と為り政府は修正の名の下に氏の説を容れ伊藤公を総裁に日本法典は名実共に日本人の手に編纂せらるるに至れり氏は平生小策を弄するを好まず小得失を争ふを潔しとせず余には唯大日本政策あるのみと語るを常とせり三十八年日比谷の焼打事件には国民を代表して令名を馳せたるは何人も知る所、晩年病を獲て閑地に就かれたるか氏の生涯には特筆すへき事多し尚ほ氏は東京代言人組合長に選挙せらるること三回に及び衆議院書記官長、司法次官の官歴あり一度東京市選出の代議士たりき以来法典調査委員、海軍主計学校教授等に任ず氏は文藻に長し最も詩を善くし一時は新聞雑誌に縦横の意見を發表して社会の注意を惹きたることもあり葬儀は校葬に依り二十三日午後自宅出棺途中行列を廢したれども遺族門弟故旧を乗せたる数台の馬車に擁せられて中央大学に立寄り職員並に学生代表者の焼香を享け順路築地本願寺別院に到り二時より式を挙行せり先つ靈柩を中央の壇上に安置し中央大学其他より寄贈に係る数十個の生花、造花、花環等を以て飾り左右の大広間に遺族故旧並に一般会葬者の列坐するや導師阿部珀琳師衆僧を率ゐる読経の上学士会、中央大学、同学員会、同学生総代、東京弁護士会、日本

弁護士会、奠南会其他の弔詞朗読あり喪主紹之助氏を始め未亡人令息令嬢、親戚松岡博士井上子爵、友人松田法相代福井準造、奥田文相、元田通相、岡野法制局長官、土方江木富井増島磯部原古賀等各博士、関衆議院副議長、貴衆両院議員、大学教授、学士会員、各学校長、弁護士其他の諸氏順次焼香し同三時を以て結了したり尚ほ中央大学学会関西支部は特に石井政吉氏を代表として上京せしめ花環を贈られたり氏の晩年は稍々振はざりしにも拘はらず当日会葬せられたる者千余名の多きに達したるは以て氏の遺徳を追想するに足るへし当日靈前に於て朗読せられたる弔辭は左の如し（順序不同）

弔 詞

大正二年二月二十日山田喜之助君病テ卒ス哀悼曷ソ勝ヘン君資性英邁ニシテ豪宕最モ気節ヲ尚ヒ世ニ敬重セラル明治十八年某等同人相謀リ中央大学ヲ創立スルヤ君亦事ニ当テ拮据精勵以テ今日ノ隆盛ヲ致セリ而シテ君ノ人格ハ其才識ト相竝テ後進ヲ訓化シタルコト幾何ナルヲ知ラス晩年事志ト違ヒ、永ク葉餌ト親ミ終ニ不帰ノ客ト為ル吾人ハ曩ニ菊池穂積ノ二君ヲ喪ヒ今復タ君ノ訃ヲ伝フ天ノ同人ニ幸セサル何ソ其レ此ニ至ルヤ嗚呼悲哉茲ニ中央大学諸同人ニ代リ謹ミテ君ノ靈ヲ祭ル尚饗

大正二年二月二十三日

中央大学長 法学博士 奥田義人

祭奠南先生文

今茲二月江南將二信ヲ伝ヘントスルノ時我共奠南先生忽焉ト

シテ梅花曲裏ノ人トナル嗚呼春夢一場固ト痕ナシ惟タ高義千秋耽光アリ焉惟タ清節万世幽香アリ焉先生業ヲ東京大学ニ卒ヘテヨリ学界ニ官界ニ政界ニ風霜于茲三十年孤行独往鉄腸石心堅操自ラ持シ凜然動カス其時ト相容レサル素ヨリ其所ナリ傲ヲ多情ノ杯酒ニ寄セ懷ヲ富艷ノ詩文ニ托ス胸中豈ニ亦一点ノ塵ヲ留メンヤ桃李ニ同シテ春温ヲ盜ミ葵藿ニ伍シテ朝暉ヲ争フハ断シテ先生ノ志ニアラサル也而カモ世人猶ホ不遇ヲ以テ先生ヲ評過セントスルカ如キハ会々以テ高義清節地ヲ掃フテ空シキヲ証スルニ足ル矣臨風哀ヲ脚ミ誠ヲ攄ヘ寅ンテ奠ヲ雪骨氷魂ノ前ニ致ス尚饗

癸丑二月念三

友人総代 江木 衷

弔 詞

大正二年二月二十日奠南山田喜之助君逝ク君ハ明治十五年代言人ト為リテ爾來三タヒ代言人組合會長ニ挙ケラレ現ニ其職ニ在リテ会務ニ尽瘁シ後代議士ト為リ司法次官ト為リ其間終始本会發展ノ事ニ努力セラレタル事蹟ハ本会カ永ク記憶スヘキ所ニ属ス今君ノ長逝ニ際シ靈柩ヲ送リテ哀悼ノ情禁スヘカラサルモノアリ茲ニ恭ク弔詞ヲ述フ

大正二年二月二十三日

東京弁護士会長 原 嘉道

弔 辭

学士会ハ会員法学士山田喜之助君ノ遠逝ヲ哀悼シ恭シク茲ニ弔辭ヲ呈ス

大正二年二月二十三日

学 士 会

弔 文

大正二年二月二十三日日本弁護士協会評議員小川平吉謹テ清酌庶羞ノ典ヲ以テ弁護士山田喜之助君ノ靈ヲ祭り告ケテ曰ク古来俊傑ノ士志ヲ当世ニ得サレハ則チ往往詩酒ニ放浪シ以テ胸中ノ鬱結ヲ遣ル其情洵ニ哀シカラスヤ嗚呼君亦蓋シ其人ナル乎君少ヨリ奇才穎脱其大学ニ学フヤ頭角斬然其司直ニ任スルヤ令名噴噴然タリ進テ議會ニ立テハ討論愕愕退テ江湖ニ在レハ傲骨稜稜タリ就中法曹界ノ氣運未タ旺ナラサルヤ君代言人組合長ニ挙ケラルルコト三回侃諤ノ議雋厲ノ筆他日能ク我弁護士会ヲシテ九鼎大呂ヨリ重カラシメタリ其功豈ニ鮮渺ナランヤ晩年君已ニ志ヲ榮達ニ絶ツト雖モ憂国済民ノ念未タ嘗テ一日モ息マス事ニ当リ物ニ触レ慷慨激越時務ヲ痛論シ人心ヲ警醒スル木鐸ノ如ク然リ惜哉大ニ其志ヲ天下ニ施スヲ得ス不遇軼軻終ニ奇才ヲ齎シテ逝ク豈ニ痛歎ニ堪ユヘケンヤ然レトモ君カ精神氣魄ハ其文章事功ト共ニ長ヘニ後世ニ伝ヘテ滅フルコトナシ夫ノ区区ノ窮達安ソ君ヲ軽重スルニ足ランヤ君倘シ靈アラハ尚クハ饗ケヨ

大正二年二月二十三日

小川 平吉

弔 詞

中央大学講師山田喜之助先生病ヲ以テ溘逝ス嗚呼哀哉先生夙ニ経世済民ノ志ヲ懷キ弱冠ニシテ能ク和漢洋ノ学ニ通シ大学予備門ヲ経テ東京大学ニ入り明治十五年其法科ヲ卒業シ官尊

民卑ノ流弊ヲ趁ハス直チニ東京組合代言人トナリ又改進黨ニ屬シ奮テ民権擁護ノ衝ニ当リ暢達ノ筆侃諤ノ弁ヲ以テ一世ヲ風靡ス余暇ニハ則チ早稻田専門学校ニ教鞭ヲ執リ更ニ同志ト吾大学ノ前身英吉利法律学校ヲ創立シ専ラ英米法ヲ教授シ実地応用ノ素養ヲ力メ其關係前後三十年ノ久シキニ亘リ此間幾多ノ俊髦輩出シ朝野有要ノ材ヲ供給ス其効績洵ニ偉大ナリト謂フヘシ先生曩ニ行政官トナリ司法官トナリ衆議院議員トナリ弁護士トナル就職長カラサルモ到ル所枢要ノ位置ヲ占メ名声籍甚後進ノ模範ヲ示セリ若夫レ詩文弁舌ニ至テハ高雅雋逸寔ニ比儔スヘキ者尠シ所謂日比谷事件ニ於テハ誤テ獄ニ下リタルモ先生カ其称首トシテ奮闘シタルハ実ニ平生ノ面目ヲ発揮シ且世人ノ尊信ヲ深クセリ今ヤ世道人心年ト共ニ頽廢セントス吾等後進ハ永ク先生ノ警咳ニ撰シテ高風ノ感化ヲ待ツコト切ナリ図ラサリキ忽焉白玉楼中ノ人トナル痛悼曷ソ禁セン然レトモ先生ノ遺徳ハ俊秀ナル令嗣諸門弟ニ由リ将来ノ社会ニ表彰セラルヘク吾等後進亦先生ノ恩恵ニ負カサランコトヲ期ス茲ニ中央大学学員会ヲ代表シ恭ク弔辭ヲ捧ク尚クハ饗ケヨ

大正二年二月二十三日

中央大学学員会理事 石山彌平

哭奠南雅契

詩酒仙遙入白雲 此時隣笛豈堪聞 浪華俠骨今何在

後素以来唯見君

大正二年二月念三

辱知 杉浦重剛 拜具

弔 辭

奠南山田先生遽然不帰ノ客トナリテ玉楼ノ召ニ赴ク嗚呼哀哉
先生資性高邁卓犖ノ才ヲ負ヒ夙ニ我法曹界ノ泰斗トシテソノ
精微ノ学殖ト宏大ノ識見トヲ以テ生等後進ヲ扶導セラルルコ
ト久矣先生又居常古人ヲ尚友シ慨世憂國ノ念殊ニ篤ク自ヲ奮
テ一代ノ類風汚俗ヲ刷新セントシ之ヲ言論文章ニ發シ世人ヲ
警醒スルコト尠カラス今ヤ政界多事風雲未タ定マラサルノ秋
ニ方リ先生ノ如キ人格崇高氣節清抗ノ士ヲ失フハ邦家ノ為メ
殊ニ惋惜ニ禁ヘス生等最モ深ク先生ニ親炙シ多年益ヲ受クル
者軒軒ノ風姿尚ホ髣髴トシテ目睫ノ間ニ在リ而シテ今ヤ幽明
境ヲ異ニシ先生長ヘニ逝ク嗚呼哀哉生等俯仰歎歎ノ余恭シク
蕪辭ヲ呈シテ先生在天ノ靈ヲ弔フ尚饗

大正二年二月二十三日 奠南会総代 川島 仟司

祭 文

大正二年二月二十日山田喜之助先生卒ス先生奇骨稜稜俗界ニ
超脱シ公余其師弟ヲ導ク常ニ大乘立身ノ法ヲ説ク逆順縦横時
ニ小乗道ノ人ヲ驚カシタルモ其志氣ヲ鼓舞シ器度ノ修養ヲ教
ヘテ世道人心ヲ益セシ大効ヤ没ス可ラサルナリ今ヤ先生天地
ヲ棺槨トシ虚空ト同化シ去ル矣追慕哀悼ノ至ニ勝ヘス弟子等
茲ニ誠ヲ致シ謹ミテ先生ノ靈ヲ祭ル尚饗

大正二年二月二十三日

中央大学実業同窓会総代 岩崎鉄次郎

弔 詞

賛助員山田喜之助先生長逝セラレ哀悼ニ堪ヘス謹ンテココニ

弔意ヲ表ス

大正二年二月二十三日

漢 文 学 会

弔 詞

先輩山田喜之助君長逝セラレ哀悼ニ堪ヘス謹ンテココニ弔意
ヲ表ス

大正二年二月二十三日 東都泊園同窓会 会員一同

弔 辭

山田喜之助先生逝カル嗚呼悲哉先生ノ我中央大学創立ニ与カ
ルヤ其校務ニ執掌セラルルト同時ニ各種ノ法律講座ヲ担当シ
テ教壇上ノ人トナリ爾來二十有余年該博ナル学識ト懇切熱誠
トヲ以テ学生ヲ誘掖陶冶セラレ今ヤ生等ノ先輩タル學員諸氏
ハ既ニ六千ニ垂トシ俊才雲ノ如ク声名中外ニ赫赫タルモノ亦
先生訓育ノ賜ト云フモ過言ニアラス晩年生等ノ為メニ論語ヲ
講シテ曰ク治国平天下ヨリ修身齊家ノ道挙テ此一書ニ在リト
其会心ノ点ニ入ルヤ案ヲ叩テ滔滔懸河ノ弁ヲ振ヒ重患ノ身ニ
在ルヲ忘ルルモノノ如シ生等為メニ感奮激励シテ蹶起スルコ
ト幾回ナルヲ知ラス今ヤ乃チ溘焉易簣セラル痛悼曷ソ堪ヘン
中央大学学生ヲ代表シ恭ク誄辭ヲ捧ケテ先生ノ靈ヲ祭ル尚饗
大正二年二月二十三日 中央大学学生総代 松隈昌隆

寅 誄

尚ほ高田似壠氏より左の弔辭を送られたり
稚翠博士電シテ曰ク奠南山田先生永眠セリト予驚テ而シテ働
ス予ノ始メテ先生ニ謁スルヤ実ニ博士ノ介ニ由ル爾來垂訓ヲ

辱ウスルコト二十有余星霜昨臘博士先生ノ疾ヲ伝フ予憂心仲
仲回春ヲ禱ルコト切ナリ而シテ先生遂ニ起タス幽明迢迢復タ
警咳ニ撰スルコト能ハス追懷再四恍トシテ音容ノ目睫ノ間ニ
彷彿タルヲ覚フ於戲哀哉

大正二年二月二十日

高田似壠 薰沐頹首

氏は余暇時時論説を草して本誌に寄せ又詩文をも投せられたり
立言正文辭流灑每篇誌上の光彩たらさるなかりしか今や逝て
歸らず嗚呼哀哉